

もうひとつ深く心に刻まれた経験は、佐野教授のお招きで実現した2019年1月25日のプレゼンテーションでのことでした。途中で佐野先生から提起された「仏教石碑はどうして非文字資料なのか」というご質問は、なかでも非常に興味深いものとなりました。質問の意味するところは明白で、文字資料の持つ多面性について考えさせてくれるものでした。資料に文字があるという理由だけで、その資料の非文字性が否定されるものではありません。先生の質問に答えようとして気づいたのは、すべての研究資料にこうした多面性があり、我々は日々、この多面性を目の当たりにしているということです。

さらに、資料の多面性を意識するような問題提起がなされたことで、私は、研究方法を練り直すことができました。この方法は、ただ一般庶民が仏教をどのように受け入れてきたかを理解しようとして採用してきたものです。佐野先生のご質問のおかげで、資料の性質にもっと気を配るようになっただけでなく、研究を一般公開するなど、研究方法の持つ意味合いについても敏感になりました。

また、非文字資料への注目は最近の仏教研究ブームとよく似ており、仏教にまつわる品々の物質的特性(materiality)にフォーカスしてきました。逆に、最近の仏教研究でも、関心の大半が研究資料の外見的特徴や、



現在、神奈川大学日本常民文化研究所で調査が行われている日本のお札

具体的な形を持つモノ(オブジェクト)のなかに読み取れるものに向けられています。モノ(オブジェクト)も、庶民の宗教生活のなかで不可欠な役割を果たしてきたと認識しているのです。

最後に、私の訪問を実現してくださった非文字資料研究センターの小熊センター長にお礼申し上げますとともに、佐野教授には私が現在行っている研究について話す機会を設けて頂き感謝しております。また、センター職員の成田さんには、滞在中の研究協力についてお心配り頂きありがとうございました。センター滞在中は大変貴重な経験をさせて頂き心より嬉しく思っています。近いうちに日本に戻って来たいと思っています。


コラム 派遣研究員レポート

名前	派遣先	派遣期間
蔣 明超	北京師範大学文学院 民間文学研究所	2018年10月10日 ~ 2018年10月26日

## 素晴らしき知行合一の旅

—— 北京師範大学派遣記録

**蔣 明超**  
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



筆者は石敢當の研究をしている。「石敢當」というと、一般的に道路の突き当たりなどに設置される魔除けや厄除けのための石造物を思い出す。史料に記録されている最古の石造りの石敢當は、宋代の学者王象之が撰した『輿地紀勝』に記載がある唐大曆5年(770年)、福建莆田県県庁にあったものである。それ以前の石碑の石敢當の記録がないため、「石敢當」という石造物は唐代中後

期に出現したと考えられている。しかし、「石敢當」はもともと石造物ではなかった。紀元前40年頃、前漢時代の史游が撰した『急就篇』に、「石敢當」という文言が最初に登場した。この文言の「石敢當」がどのような経緯で石造物の「石敢當」になったのか。果たして両者の間には必然的な関係があるのか。そのような疑問点を調査すべく、2018年10月10日から10月26日まで、



非文字資料研究センターの派遣研究員として、北京師範大学文学院民間文学研究所を訪問した。

北京師範大学文学院は中国民俗学研究で知られており、特に神話、民間故事などの研究が有名である。中国民俗学理論創始者の鐘敬文先生は、北京師範大学で初めて民俗学を学問として確立した。長い歴史の中で、烏丙安、劉鉄梁、万建中、楊利慧など、民俗学における優秀な人材を育てた。滞在期間中、民間文学研究所所長の万建中先生と文学院副院長の楊利慧先生と面談して、貴重な経験を教えていただいた。また、博士の高志明さんにはチューターとして、いろいろと付き合っていたいただいた。期待した通り、北京師範大学図書館で多くの石敢當資料を入手することができた。特に、唐代の道教と民間信仰関連の本に、疑問を解決する重要な鍵となる資料が見つかった。中国国家図書館にも行って、いろいろ調べ、情報を手に入れた。

文献資料調査のほか、北京の様々な場所に石敢當を探しに行ったが、意外にも石敢當は少なかった。しかもそれらは全て泰山石敢當であった。石敢當のほか、まだ北京で盛んな石信仰、辟邪文化のものも数多く見た。たとえば、北京故宮の四隅に巨大な石が配置されている。また、北京東四街の民家には、家門の下部の両側に常にペアの石鼓が置かれている。これは「門當」と呼ばれ、「門當」がある家には、必ずその家門の上部にも偶数の木造の柱があり、これは「戸対」と呼ばれている。「門當」と「戸対」は辟邪のほか、昔は家主の身分を表明する役割もあった。現代では「門當戸対」という言葉もよく使われ、結婚する相手の身分と経済力が自分と釣り合いがとれているという意味を持つ。

最も素晴らしいことは、調査予定になかった、いくつかの学術研究会にも参加させていただいたことである。中国社会科学院の博士研究員張多さんに誘われ、10月15、16日に同院で開催された第2回民族文学論壇に参加し、中国少数民族、さらに日本の文学作品を解読する論文を拝読する機会を得た(写真1)。中国民俗学会副会長(当時、現会長)、中国社会科学院世界宗教研究所研究員葉涛先生に誘われ、10月20日に開催された『中国宗教報告』出版10周年座談会に参加し、中国の宗教研究は中国五大宗教(道教、仏教、カトリック教、新教、イスラム教)のほか、儒教と民間信仰も入れた、中国七大宗教を対象にしていることを初めて知った(写真2)。10月21日、22日は、張多さん、高志明さんと一緒に、北京大学で行われた中国民間文学(民俗学)100周年記

念発表会に参加し、万建中先生、楊利慧先生、周星先生などの発表を拝聴し、大変勉強になった(写真3)。

今回の北京師範大学派遣経験はまさに素晴らしき知行合一の旅であった。このような調査旅行が実施できた背景には、非文字資料研究センターの皆様と北京の万建中先生、楊利慧先生、葉涛先生及び張多さん、高志明さんなどの師友のご協力があったおかげである。感謝の気持ちを申し上げる次第である。



写真1 第2回民族文学論壇参加記念撮影



写真2 『中国宗教報告』出版10周年座談会参加記念撮影



写真3 中国民間文学(民俗学)100周年記念発表会参加記念撮影